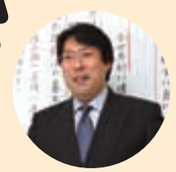
誰もが抱える悩みをパパッと解決！

福田貴一先生の福が来るアドバイス

本気で”本気でやる子“を育てましょう！



早稲田アカデミー
千葉ブロック統括責任者
福田　貴一

子どもを本気にさせるには、まずは周りの大人が本気になる必要があります。しかし、どんなに大人が本気になっても、それを言葉や表情に出さなければ、子どもには”大人の本気“が伝わりません。どうすれば”大人の本気“を子どもに伝えることができ、そして、”本気でやる子“を育てることができるのか。このことについて考えてみましょう。

大人の問いかけで育む中学入試に勝ち抜くために必要な力

中学入試では、『知識』『処理能力』『思考力』といった3つの力が必要とされています。そのなかで最も必要と言われている力が『思考力』、子どもたちが自分の頭で考え、自分の言葉で語る力です。

もちろん『知識』も重要ですが、単に暗記しただけでは、「見たことがある」「知っている」「書ける」ようになっても、昨今の入試で求められている「知識が使える」「知識について自分の言葉で語れる」といった力は身につきません。同様に、計算力や制限時間内に問題を解答するといった『処理能力』も、練習を繰り返せばスキルアップしていきますが、どんなに速く計算できたとしても、『思考力』がなければ中学入試の問題は解けません。つまり、暗記しただけの『知識』やただ速いだけの『処理能力』があっても、『思考力』がなければ、昨今の中学入試を突破することはできないのです。

中学入試を勝ち抜く『思考力』を育むためには、まず、「子ども自らが興味を持って勉強をする」といった前向きな姿勢を身につけさせましょう。たとえば、普段の会話で「なぜ?」「どうして?」「あなたはどう思う?」などの問いかけを行うことで、子どもの考える力を引き出すのです。その繰り返しが、やがて考える力になり、中学受験で勝ち抜くための『思考力』として養われていくはずです。

親だからこそできる”本気でやる子“を育てる接し方

”本気でやる子“を育てるためには、まず、子どもに期待しましょう。子どもは親の期待を感じると、それ自体が大きな原動力となり、やる気につながります。そして、その期待に子どもが応えてくれたならば、必ず褒めてください。「頑張ったね」といった言葉だけで十分です。子どもは褒められたことがうれしく、「もっと頑張ろう」とやる気を持続させます。なお、大きな結果が出たときにまとめて褒めるよりも、小さな変化をよく観察し、ところどころで褒め言葉をかける方がより効果的と言えるでしょう。

また、手助けも、本気でやる子“を育てるためには欠かせません。ただし、この場合の手助けとは、「ヘルプ」ではなく「サポート」、つまり、「共に考え、一緒に行う」ということです。魚釣りに例えるならば、ヘルプは魚を釣ってあげること、サポートは魚の釣り方を教えてあげることです。言うまでもありませんが、いつまでも親が魚を釣ってあげていると、子どもはいつになっても自分で釣ることはできません。どうやったら釣れるのか、その方法を試行錯誤しながら一緒にやってみる、これが子どもの考える力、『思考力』を伸ばすサポートです。

そのほか、ときには勝負でわざと負けたり、または圧倒的に敵わないと親の力をみせつけたりすることも、子どもを”本気でやる子“に育てるためには有効です。また、保護者の方が見本を見せることも子どもにとっては刺激になるでしょう。これらのことを繰り返すうちに、きっと、子どもは精神的に成長し、”本気でやる子“に育っていくはずです。

”本気でやる子を育てる“ために子どもの気持ちを察しましょう！

子どもというものは、親に褒められれば達成感を得て、その達成感を「またできる」といった自信につなげていきます。これこそ、好循環、プラスのスパイラルの誕生です。反対に、どんなに努力しても結果が出ないとき、子どもたちはすぐマイナスのスパイラルに陥ってしまいます。では、どうすればマイナスのスパイラルに陥った子どもを救えるのか…。これもプラスのスパイラルを生むときと同じで、保護者の方が良いところを見つけ、そのことについて褒めればいいのです。

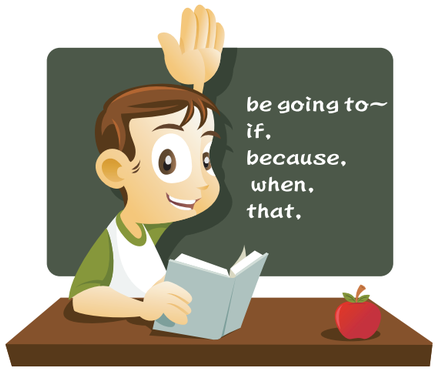
子どもたちの顔は信号機です。必ず喜びや悲しみ、うれしさや苦しみが顔に出ています。「できた」「できなかった」といった結果だけを見るのではなく、子どもの顔や行動をよく観察し、その変化を感じ取り、そして、褒めることでプラスのスパイラルへと導く―。これも”本気でやる子“を育てるために心がけたいことのひとつです。

”本気でやる子“を育てるには本気で家庭学習をサポートしましょう

学校や塾の授業で習ったことを、子どもたちが単なる『知識』から『使える知識』にするためには、家庭学習が大切です。

学習スタイルとしては、小学校1年生から3年生までは、学校や塾以外の学習はプラスαと考え、「勉強をさせる」ことよりも、興味や関心を持たせることに注力しましょう。4年生になると、受験勉強も本格化してきますので、4科目のバランスを取りながら、基礎力や思考力を養うようにしましょう。そして、5年生から6年生にかけては、一人ひとりにあわせた学習内容、つまり、弱点補強や志望校に向けた勉強が必要になります。

このような学習スタイルを身につけさせるためには、何よりも時間と場所を決めることが重要になります。低学年のうちは、なるべく保護者の方が勉強につきあってください。つきっきりになる必要はありません。たとえば、リビングで勉強する子どもにキッチンで料理しているお母さんが声をかけるなど、「勉強しているところを見てくれている」と子どもが思えるような環境を作りましょう。4年生は受験生への移行期なので、子どもが4科目のバランスが取れた勉強計画が立てられるように導いていきます。そして、5年生からは一人で机に向かい、自分が立てた計画通りに勉強できることが望ましい形です。



学習時間については、週に小学校3年生は算国で3～4時間ほど、4年生は理社の学習を加えて8時間ほど、5年生は8～11時間ほどが理想です。6年生は、夏休み前は9～12時間程度、過去問演習や志望校に向けた学習が始まる夏休み以降は20時間ほどと考えましょう。「塾とは別に家でもそんなに?」と思われるかもしれませんが、だからこそ、低学年から段階的に勉強時間を長くしていくのです。少なくとも、難関中学校を受験する子どもたちは、入試直前期になると20時間ほど勉強していることだけは忘れないでください。

わが子を信じることこそ”本気でやる子“に育てる一番の秘訣

決まった場所と時間。これは家庭学習だけに必要なことではありません。昨今、「早寝早起き朝ごはん」が推奨されているように、毎朝決まった時間に起き、朝ごはんを食べ、学校では休み時間や体育の授業中にしっかり身体を動かす―。この規則正しい生活こそが、中学受験を乗り切るために欠かせない「健康」につながるのです。そして、この規則正しい生活のなかに、「決まった時間に決まった方法で勉強すること」を低学年のうちに保護者の方が組み入れていけば、いつの間にか家庭学習が習慣のひとつになります。そのことが高学年になったときの計画的な家庭学習につながるのです。

長い受験勉強のなかでは、なかなか思うように結果が出ないことも多々あるでしょう。しかし、「この子は必ず頑張れる」と保護者の方が常に信じ、本気でサポートすれば、必ずや子どもたちは”本気でやる子“に育つはずです。

お便りをお待ちしております
みなさまのお悩みに福田先生が紙面上でお答えします。
下記のアドレスまでお寄せください。
メール：success12@shahyo.com
採用された方には、オリジナル福スタンプを差し上げます。